

---

# 機動戦士ガンダムSEED RYOTU

トライエース

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

機動戦士ガンダムSEED RYOTU

### 【Nコード】

N8186H

### 【作者名】

トライエース

### 【あらすじ】

平和(?)な町亀有。今新たな脅威にさらされる。江崎教授たった一人の発明のせいで。カオスなストーリーのガンダムとこち亀の話

## 長いエピソード

「あー、暇だなあ」

派出所にいた両津はアクビをしながらぼやいた。

バシユン！

どこからともなくビームライフルの音が聞こえてきた。

「ん？なんだ！」

両津が派出所から出るとそこには……

「あ！あれは！」

両津がそれを見てなんか言おうとした瞬間に、

「あれはフリーダムガンダムとジャスティスガンダムであります！」  
どこからともなく現れたカエルに似た奇怪な生物にセリフを奪われた。

人のセリフを奪うなー！！」

そう言っただけで両津はその奇怪な生物を宇宙の彼方に飛ばした。

「ゲローローー！！！！」

なんか聞こえたが無視した。

「おお両津！」

大原部長がタケコプターをつけ本署から飛んできた。

「何ですか部長。」

両津がそそくすと大原部長は、

「何ですか？じゃない！あれを見る両津！」

「見ました。」

両津がそう言っていると大原部長が半泣きになりながら、

「頼む両津。あれをなんとかしてくれ！」

「なんとかしてくれ！と言われましても、生身の人間がガンダムに勝てるわけないでしょー！！」

「安心しろ、こんなこともあろうかとお前の機体を用意した。」

大原部長がそう言って自分の机のしたをさわると奥の部屋に行く扉の手前から階段が出てきた。

「……！」

両津は啞然とするしかできなかった。

「さあ両津。この下にお前の機体がある。さあ行け！」

「は、はい！」

両津がそう言い階段を降りて行った。「こ、これは」

両津は大原部長に言われた通り機体に入った。

「こ、これはデストロイガンダムじゃないか！」

なぜ両津がデストロイガンダムを知ってるかは気にするな。

「両ちゃん。」

「おお、麗子か」

「先輩。」

「おお中川も！」

両ちゃんと言ったのは麗子。先輩と言ったのは中川。

「二人とも今どこに？」

両津がそうきくと中川が、

「話は後です先輩。まずは江崎教授の研究所から奪取された二機の

ガンダムを破壊してください。」

「わかった！（江崎のやるう！）」

中川がそう言うのと両津は素直に了解した。

「しかしワシはガンダムを動かしたことはないぞ！」両津がそう言う  
うと麗子が

「それなら安心して、江崎教授から『ゴリラ君でも判るデストロイ  
ガンダムの操縦マニュアル』をもらってるからこちらから説明する  
から」

「わかった！（あんにやるー！）」

一通り説明が終わって両津が発進した。

「両津勘吉巡查長。出る！」

「僕たちは一体何をしているんだろう。」

茶髪のフリーダムガンダムのパイロット キラ・ヤマトがジャステイスガンダムのパイロット アスラン・ザラに聞いた。

「あのお方の命令に従っているんだ！」

「そうだったね。」

アスランがそう言い、キラが理解した。

「いっけー！」

キラがハイマツトフルバースト・本日十回目を放った。

「見る人がゴミのようだ！」

アスランはそう言いながらファトムで遊んでいた。

「そのガンダム！もうやめろー！」

両津がそう言いながらスーパースキュラを放つ。

「ぐわあー！」

直撃はしなかったがフリーダムは片足を失った。

「キラー！くっ、まだあんなのが残っていたのか。一旦退くぞ！」

「くっ！」

二人はそう言い飛び去った、もの凄いスピードで、

「はやっ！」

両津はそう言うしかなかった。

「先輩帰還してください。」

「わかった。」

中川に言われた通り帰還した。

「で、あれは何なんです部長？」

両津がそう言うのと空から謎の二人が落ちてきて、

「何なんです部長と聞かれたら。」

「答えてあげるが世の情け。」

「世界の破壊を防ぐため。」

「世界の平和を守るため。」

「愛と真実の……」

と二人の長いセリフは大原部長の放った爆裂ゴッドフィンガーによって止められ、二人は地平線の彼方に消えていった。そして大原部長は話を続けた。

「あー、おほん。 両津よ昼間に登場したあの機体を知ってるな」

「はい。」

「でだ両津よ。 あれは中川が言つてたように江崎教授が開発したものであつてあれは元々いつ来るかわからない対エイリアン用の兵器なのだが、その二機が今日ある組織に奪取された。」

「そのある組織とは？」

両津がそう聞くと部長が、

「その組織は……」

「その組織は？」

「『THE PINK』だ」

「『THE PINK』……」

その後署長との会話で『THE PINK』は『ファントムピンク』に改名された。

自由すぎる翼、短すぎる話（前書き）

どんどんカオスになってく話

## 自由すぎる翼、短すぎる話

その後色々あったが、だいたいのことはわかった。まず第一にフアントムピンク（署長が命名）が江崎教授の開発した新型兵器を奪取したこと。

第二にフアントムピンクが奪取した兵器が何に使われるかがまだはつきりとしていないこと。

第三に奪取された機体は破壊しなければならないこと。

第四にこのストーリーがわけのわからない話ということ。

「では以上で会議を終了する。」

「いまの会議だったのか。」

署長の会議終了の言葉につっこんでみた。

「ああ両津。」

「げっ部長。」

「このあと二人で話したいんだ。ちょっと来てくれ。」

「はあ。」

部長に連れていかれていた場所は屋上だった。

「昼間ありがとうな両津。」

「いやあそれほどでも!」「両津よ、地球の全人類の命運は貴様にかかっている。これからも頼んだぞ。」

「部長……。はい!」なんか渋臭い話になりそうだがまあいいか。

『一万年と二千年前から……』

「あっ部長ケータイが鳴ってます。」

「わかっておる。はいもしもし?ああ署長。えっ、フアントムピンクが!ではすぐに。」

部長が署長と何かを話していたようである。多分フアントムピンクについてのことだろう。



「どうしたんです、部長？」

「ああ両津。大変だ。ファントムピンクがこっちに向かっているよ  
うだ。至急迎撃準備だ。」

「はっ！（。ロ。）」

・カタパルト・

「両ちゃん、残念ながらデストロイはメンテナンスがまだ終わって  
ないから出撃出来そうにないのよ。」

「じゃあ、どうすんだよ？」

戦艦KATUSHIKAのブリッジにいた麗子からその話しを聞いて  
両津（今は黒いパイロットスーツを着ている）は不安に陥った。

「大丈夫です先輩。まだ別の機体がありますから」

中川が新しい機体について言おうとしたら奴が現れた。「それはス  
トライクフリーダムガンダムであります！」

「・・・」

「ゲローラー！」

人のセリフを奪われキレた中川はとりあえずそのカエルのような奇  
怪な生物を核に取り付け発射させるよう部下に命令した。

・カタパルト・

「両ちゃん今回からは私もイージスガンダムに搭乗して出撃するか  
ら。」

麗子はどうやらイージスに乗り出撃するようだ。

（大丈夫か？）

「ねー圭一君あのピンク色のガンダムかぁいいよお。お、お持ち帰  
りしたいよー。」

「俺にはかっこいいようにしか見えないが」

セーラー服を着た女子高生と制服を着た男子高生の会話だ。コック  
ピットからは聞こえないが。

・ミシミシミシ

「ギャー！ー！ー！割れる割れる割れる！」

女子高生が男子高生にアイアンクローをかましたようだ。そばにいた整備員が止めにかかるが……。  
見なかったことに。

「両津勘吉巡查長、ストライクフリーダム、行きます！」

「麗子、イージスガンダム、行きます！」

二人は出撃した。

・アメリカ（戦争中）・

「マリア様これ以上はもう！」

「もう少し耐えなさい！あと少しで新型の二機に乗った援軍が来ます！それまではなんとしても！」

「わかりました！」

今の会話はヴァルキリー隊（本作オリジナルのガンダム、ヴァルキリーガンダムで構成されている）とその隊長・マリアの会話である。  
「僕はなんで戦っているんだろう。」

「あの御方が遊んで来いって命令されたからだ。」

「そうだったね。」

またしてもキラとアスランの会話。キラはすぐに作戦の内容を忘れてしまうもよう。

「はあああああ！イヤツホオオオオウ！」

と言ってアスランはファトムを飛ばした。

「ぐわああああ！」

残っていた部隊の半分近くが崩壊。

「朝ご飯食べて、元気モリモリ！アイラブイツツ！」キラはそう言っ  
てハイマツトフルバースト、をした瞬間いきなりプラスマがフリー  
ダムの両足をぶち抜いた。

「うわああああ！」

両津が乗っているストライクフリーダムの超長距離砲撃だった。

「あなたたち、やめなさいいいいいい！」

「うわあああああ！」

麗子はシールドでジャステイスに体当たりした。

「大丈夫か!？」

「え、ええ大丈夫です。あなたたちは一体？」

「ワシは両津勘吉。あのピンク色のガンダムに乗っているのが麗子だ。」

「私はマリア。ヴァルキリー隊の隊長です。」

「麗子です。よろしく」

とりあえず挨拶はした。

「あの……」

「話しは後だ！お前たちは軍を一旦退け！」

「はっはい！」

とりあえず両津はマリア率いるヴァルキリー隊を後退させた。

「くそー。あいつ！」

「許せないよね？アスラン！」

「ああ！」

キラとアスランが突っ込んで来る。

「ちっ、あいつら！……んっ？」

迎え討とうとした時両津はフリーダムとジャステイスの変化に気付いた。

夜で暗いせいか分かりにくいがよく見ると、ピンク色をしている。

全てが。

「おっおいお前らそのピンクは一体どうしたんだ？」両津がそう聞く  
くと二人は、

「……あの御方が勝手に……」

「パイロットスーツまでピンク色に……」

「バラエーナのプラズマやクフィアスのレールガンの色までピンク色に……」  
「全てがピンク色に変えられた……」

「……………」

両津は一瞬同情しそうになった。

「くそ！覚えてやがれ！」

「あつ待ってアスラン！」そして二人は逃げ出した。戦場には両津、麗子、マリアとマリア率いるヴァルキリー隊が残された。

「帰るか。」

「そうね。」

「あつ私もご一緒させてもらっても……………」 「いいぜ別に。」

「

そして三人とマリア率いるヴァルキリー隊は戦艦KATUSHIK Aに帰還した。

- 戦艦KATUSHIKカタパルト -

「今帰ったぞー。」

「あつお帰りなさい先輩。あれそちらの方は？」

「ああ、この人はヴァルキリー隊隊長のマリアだ。マリア紹介してくこっちは中川だ。」

「はじめまして。」

「はじめまして、中川さん。」

とりあえず自己紹介を済ましたようだ。

- フォントムピンク基地内部 -

「で、なぜ失敗なんてしたんですか？」

ピンク色の髪の少女はキラとアスランにそう言った。

「そりゃ全てをピンク色に変えられたらやる気を失いますよー！アスランがそう答えた。

「ふーん」

「ア、アスラン！」

「また会えたら、会おう」

「アスラン……………」

ピンク色の髪の少女はアスランにアイアンクローをした。  
ミシミシミシ……

「ギャー……！割れる割れる割れる！」

「アスラン！もうやめて、ラクス！」

「ウフフ、フフフフ！」ラクスと呼ばれたピンク色の髪の少女は  
やめる気はないらしい。

アスランの悲鳴は基地内に響き続けた。

- 戦艦 KATUSHIKA -

「おお、両津。」

「ただいま戻りました。部長。」

「ご苦労さん。そちらの方は？」

「はじめましてヴァルキリー隊隊長のマリアです。よろしくお願  
いします。」

「ああ、はじめまして大原です。」

お互いに自己紹介をしてから大原は、

「ところで気になったんだが、ヴァルキリーガンダムについて教え  
ていただけませんか？」

「ええ、いいですよ。」

さすがに大原部長もヴァルキリーガンダムが気になったようだ。

- ヴァルキリーガンダムについて -

1、三段変形ができる

2、MS形態はいわゆる戦闘形態

3、MA形態は高速で移動できる

4、MSとMAの中間の形態はよくわからん

5、ヴァルキリーガンダムには最新鋭の接近戦専用ビーム兵器

「ビームランス」を装備している

6、あらゆるビーム兵器を全て無効にする

ヴァルキリーガンダムは本作オリジナルのガンダムです。実際に

は存在しません。

「です。」

マリアさんは一通りヴァルキリーガンダムについて簡単に説明してくれた。にしても簡単すぎる……。

「ヴァルキリーガンダムはビーム兵器なら全て無効にできるんですよね？どうやって無効に？」

「大人の事情というやつで教えることができないですよちよびひげハゲ野郎。」

「……。」

相当ショックを受けたらしい。

にしてもヴァルキリーガンダムのビーム兵器を無効にするのは凄い。

「はぁ……。」

これから先が不安だ。と誰もが思った。

**自由すぎる翼、短すぎる話（後書き）**

ヴァルキリーガンダムは本作オリジナルです。ヴァルキリーガンダムは本作オリジナルです。

## 悲しい運命。圭一君の裏切り。

「せんぱーい！」

向こうから中川が叫びながら走ってくる。

「どうした中川？」

「さっきの戦闘で先輩のストライクフリーダムのスーパーを超過してしまったスーパードラグーンになぜか破損箇所が！」

「えっ！？」

宇宙での戦いはまだ先だが、ストライクフリーダムのスーパーを超過してしまったスーパードラグーンが破損してはストライクフリーダムはストライクフリーダムではなく、フリーダムを超過してしまったフリーダムに成り下がってしまう。

それだけではどうしても避けたかったため両津は、

「ストライクフリーダムのスーパーを超過してしまったスーパードラグーンが破損してはストライクフリーダムはストライクフリーダムではなく、フリーダムを超過してしまったフリーダムに成り下がってしまうから、至急スーパードラグーンを修理しろ！」

「はい！」

中川は整備場に走って行った。

「にしても弱ったな。」

修理しろとは言ったもののその間両津は戦闘に参加できなくなってしまうのだ。デストロイはでかすぎるためまだメンテナンスが終わってない。

「どうしたもんか。」

両津が悩みながら歩いていると艦内放送が入った。声から察するに大原部長のようである。

「両津巡查長は至急整備場に。繰り返す両津勘吉巡查長は至急整備場に。」

なんだろう、と思い両津は整備場に向かった。



## 整備場

とりあえず両津は整備場に来た。中は暗くスポットライト(?)が両津を照らしている。

「こんな所に呼び出して、何の用ですか?部長。」

両津は部長に対してそう聞いた。するとどこからともなく大原部長の声が聞こえてきた。

「フッフ、よく来たな両津。」

「ぶ、部長の声はどこからともなく聞こえてくる!どこにいるんですか、部長!」

「ここだ!」

部長がそう言うと同時に両津の歩いていた通路の右手と左手にスポットライトがあてられた。そこには二機のガンダムがあった。

「な、なんだこれは!?」

「フッフ、驚いたようだな両津。」

部長がそう言うのと両津の正面にスポットライトがあてられた。そこには大原部長がいた。

「ぶ、部長!こ、これは一体。」

「聞いて驚くなよ両津。これは連合軍から届いた新型MS、『ガイア』と『セイバー』だ。」

「ガイアとセイバー……。」

両津はしばらく黙って立っていることしか出来なかった。

「ガイアをお前にだそうだ。」

「ワ、ワシにですか?」

「そうだ。」

これでもう一度戦える。その時両津はそう思った。

「そしてセイバーは私にらしい。」

部長がそう言った時両津は驚いたようだった。

「えっ部長が。」

「これからよろしくな?」

「部長……はい！」

二人は握手した。

一方ファントムピンクでは

「あー、すっきりしましたわ。」

ラクスはとても満足そうだった。

一方アスランは今にも魂が抜けそうな感じがした。

「あなたたちでは力不足ですから素晴らしい助っ人を呼びましたわ。」

「す、助っ人？」

ラクスがそう言うのアスランが復活してそう言った。

「そう。素晴らしい助っ人ですね。いらっしやい……」

そして向こうから誰かくる。

「ステラ・ルーシエ。」

戦艦 KATUSHIKAI

「そういえば連合軍から助っ人が来るんだっけかな。」

「助っ人？」

大原部長が何かを思いだしたかのようにそう言うと両津はあまりうれしくなさそうにそう聞いた。

「なんだうれしくないのか？」

「そういうわけじゃないんですけど、急過ぎません？」

「うーんまあそう言われるとな。」

その時艦内放送が入った。

『両津勘吉巡查長、大原部長、麗子さんは至急第一カタパルトに集合してください。』

「ん？なんだ？」

「まあとりあえず行こう。」

二人は第一カタパルトに向かった。

- 第一カタパルト -

「どうしたんだ中川？」

第一カタパルトにつくなり両津は中川にそう聞いた。

「ああ先輩と部長。どうやらもうすぐ連合軍の助っ人が来るらしいですよ。」

「なに、それは本当か！」

そう話していると連合軍の助っ人が来たようだ。

- 第一カタパルト -

「はじめまして。シン・アスカです。裏切り者を抹殺するため連合の基地より助っ人に来ました。搭乗機はインパルスガンダムです。」

「エドワード・ハレルソンだ。切り裂きエドって呼ばれる。搭乗機はソードカラミティだ。」

「ジェーン・ヒューストンよ。搭乗機はフォビドゥンブルーとデュープフォビドゥンよ。」

「レナ・イメリアです。搭乗機はバスターダガーです。」

四人はかくく自己紹介をした。そして両津たちも簡単に自己紹介をした。

「では皆さん、今日はもうもう遅いですし休みましょうか。」

部長がそう言うともみんなは賛成したように第一カタパルトをあとにした。

- 第一カタパルト -

第一カタパルトでは二人組の男女が何かを話しているようだ。

「はうう、ねー圭一君あの青いのかあいよー。お、お持ち帰りしたいよー。ねー圭一君お持ち帰りするの手伝ってよー。」

「断る。」

「……。どうしてそんなこと言うのかな。かな。」

「レ、レナー！」

「ひどいよ圭一君。圭一君はずっと私の味方だと思っていたのに。」

裏切られた気分だよ。」

そう言うとレナはどこからともなく巨大な鉈を取り出した。

「レ、レナ！や、やめろ！」

「あはははははは！ひどいよ圭一君！私を騙していたなんて許せないよ！」

「お、俺はそう簡単には殺せねーぜ。」「あはははははは！声が震えているよ圭一君！あはははははははは！」

「う、うわぁーーーーー！」

「あはははははは！逃げても無駄だよ圭一君！」

「く、くそ！」

「あーそつかあ。そういえばさつき梨花ちゃんと会ったよねー。あの時に圭一君が毒されちゃったんだー。だったらそれを早く取り除かないとー。」

「気にいらねーな。」

「あはははははは！今から私はその毒を取り除いてあげるよ！あははははははは！」

「ギャーーーーー！」

・通路・

両津、中川、麗子、大原部長たちは四人をそれぞれの部屋に案内したあと自分たちの部屋に戻っていく。

明日からの戦いに備えるために寝た。

「ねえ作者さん。なぜ『ハヤテのごとく！』から参戦している今回のこの私の出番がこんなに少ないのかしら？」

「すみません。はい本当にすみません。」

「許しませんよ。」

「ぎゃーーーーー！……！……！……！……！……！……！……！」

悲しい運命。圭一君の裏切り。(後書き)

次回はオリジナルガンダム、ダークガイアガンダムが登場！

**番外編（前書き）**

両津たちの戦いの数日前のお話。

## 番外編

- 亀有公園前派出所 -

「あー暇だー」

両津はあくびをしながらそう言った。

「またそれ両ちゃん。」

「あはは。先輩らしい。」

近くにいた麗子と中川がそう言う。

「あーあ、なーんか面白いことねーかなー。」

両津がそう言ったときパトロールから寺井が帰ってきた。

「ただいまー。あれ両さんまた暇そうだねー。」

「ああ暇だ。」

「だったらまたあれやらない？」

「あれを？」

「うん。」

あれとは……

「あれか……。まあ暇潰しにはなるか。じゃあやろつぜ遊戯王を。」

「じゃあ僕も」

「じゃあ私もやろつかしら。」

寺井と両津が遊戯王をやろつとしたとき中川と麗子が入ってきた。

「面倒だからサバイバルにしねーか？」

「ならワシも。」

いったいいつからいたのか大原部長が割り込んできた。

- 亀有公園前派出所 -

『じゃんけんポイ。』

先攻が両津次に大原、中川、麗子、寺井の順番だ。

特殊ルールとして全員1ターン目からは攻撃宣言できない。

両津

「ドロー！」

両津（『大嵐』か）

中川

「どつしたんですか先輩。」

両津

「モンスターをセット！手札から『迷える子羊』発動！ターンエンド！」

大原

「ドロー！」

大原（きた！『融合』！あとはブルーアイズ三体。）

大原

「カードを三枚セット！ターンエンド！」

大原（警戒させるためワザと融合を伏せたぜ！）

中川

「僕のターン！ドロー！」

中川（『未来融合フューチャーフュージョン』か、なら。）

中川

「手札から『未来融合フューチャーフュージョン』発動！『F・G・D』を選択！デッキから『ハウンドドラゴン』三体、『ドル・ドラ』二体を墓地に送る！カードを二枚伏せ、『サイバードークエツジ』召喚！効果で墓地のハウンドドラゴンを装備！ターンエンド！」

麗子

「私のターン！ドロー！」

麗子（『サンダーボルト』今使うのは勿体ないわね。）

麗子

「モンスターをセット！カードを三枚セット！ターンエンド！」

寺井

「僕のターン。ドロー。」

寺井（『龍の鏡』か。）



寺井

「手札から『二重召喚』発動！モンスターを二枚伏せ、カードを三枚セット！ターンエンド！」

両津

「ワシのターン！カイザー流ドロー！」

両津（『避雷針』・・・）

両津

「手札から『大嵐』を発動！」

大原

「なに！」

麗子

「ええっ！」

中川

「そ、そんなー！」

寺井

「うつつ。」

両津

「手札から『融合』を発動！手札の『ブルーアイズ』三枚を融合！  
両津以外の全員

「なんだと！」

両津

「部長にダイレクトアタック！アルティメットバースト！」

大原

「くっ！」

大原部長の残りライフ3500

両津

「さらに『融合解除』を発動！部長にダイレクトアタック！」

大原

「うおー！ー！ー！」

大原部長デュエル終了。

両津

「さらに残ったブルーアイズ二体で中川を攻撃！滅びの爆裂疾風弾

ハイストリーム

！」

中川

「うっつ。」

中川の残りライフ2800

両津

「カードを二枚伏せターンエンド！」

続く……

番外編（後書き）

多分続く。

嫌がらせて射出されたドードシルエット。裏切り者のシン。

- 戦艦 KATUSIKA -

ビー！ビー！ビー！

「うおっ！なんだなんだ！？」

艦内の警報が鳴り両津はそれにより叩き起こされた。

「い、いつたいなにが？」

その時艦内放送が入った。

「両津勘吉巡査長は至急作戦会議室に！繰り返す！両津勘吉巡査長は至急作戦会議室に！」

「よ、よくわからんが非常事態ってことは確かだな。」

両津は目にもとまらぬ速さで着替え作戦会議室に向かった。

- 作戦会議室 -

初めて入るが作戦会議室は以外と普通だった。

「では作戦会議を始める。」

部長が今回の作戦について説明する。

「今回の作戦はファントムピンクからの攻撃に迎撃するというものだ。新型の漆黒のような黒いガンダムがいるようだ。ファントムピンクの機体にしては珍しい。侮るなよ。今回の作戦にはエドワード、シン、ジェーン、レナが参戦する。作戦エリアは東京湾上空になるだろう。では解散！」

- カタパルト -

「両津勘吉、ガイア出る！」

「シン・アスカ、コアスプレnder、行きます！」

「エドワード・ハレルソン、行くぜ！」

「レナ・イメリア発進します。」

「ジェーン・ヒューストン、ディープフォビドゥン行くわよ！」

「麗子行きます！」

「大原、セイバー行きます。」

・フロントムピンク、カタパルト・

「ねえステラさん。機体の調子はどうかしら？」

ラクスがステラにそう聞く。

「問題無い。」

「そう良かった。その機体で悪い奴ら全員抹殺してきてくださいね。」

「うん。ステラ行ってくるね。」

「はあ。アスラン・ザラ、ジャスティス出る！」

「はあ。キラ・ヤマト、フリーダム、行きます！」ステラが発進してからアスランそしてキラが発進した。

・戦艦KATUSHIKA付近・

シンの機体 インパルスが今やっと変形合体(?)を終えた。

「今日はフォースな気分だからフォースインパルスで。」

そして全員東京湾に向かった。

・東京湾・

「敵はどこだ？」

両津がそう言ったその瞬間プラズマがとんできた。

「危なっ！」

続けざまにシンたちに放たれる。

「くっ！」

「どこだ！どこにいる！隠れてないで出てこい！」

両津がそう言うと漆黒のガンダムがいきなり現れた。

「あ、あれはミラージュコロイド！」

大原がそう言うと

「ミラージュコロイド？なんですか、それは？」と両津が聞いた。

「こんのたわけが！ミラージュコロイドも知らないのか？いいかよく聞け！ミラージュコロイドは機体の姿、形を自由に消せるんだ！リーダーにも反応がなくなるしな。」

「じゃあ広範囲に攻撃すれば当たりますね。」

そう言うつと両津のガイアはブラストシルエツト（いつの間にか来ていた）に換装した。

「完成！Bガイア！」

「貴様いつの間に改造したんだ！」

「細かいことは気にしな〜い気にしな〜い」

そう言うつと両津はブラストシルエツトのプラズマ砲

「ケルベロス」とレール砲をダークガイアに向けた。

「秘技、Bガイア流一斉射撃！」

プラズマ砲からはプラズマが、レール砲からはレールガンの弾が、ミサイルがダークガイアに飛んでいった。しかし、

「ははは！見る！ダークガイアがゴミ・・・えっ？」

ダークガイアのまわりにはバリアが張られていた。

「防がれたか・・・。しょうがない、ここはSFガイアストラヤタムになるしか。」

「貴様まだ！」アーエンジェル「じゃあAAガイアで」

「じゃあじゃない！」

両津と大原はしばらく言い争っていた。

「うおおおおお！」

シンがどこからともなく現れたドードシルエツトのドードをフォースインパルスの手でとりダークガイアに突撃した。

「うおおおおお！（やけくそ）」

シンのフィンパルスの攻撃は一瞬ミラージュコロイドを使ったダークガイアには当たらなかった。しかし、

「もらつたああああ！」

エドワードのソードカラムティの攻撃はインパルスの時と同じように避けられた。が、しかし。

「たあああああ！」

今度はジェーンが海中からディープフォビドウンのビームジャベリンで攻撃したが避けられた。

「甘い！」

今度はレナがバスターガンダムで零距离砲撃を行った。

「きゃあああああ！」

当たった。

「ステラーーーーー！」

シンがドードでトドメをさした。

「ステラーーーーー！」

シンはステラの機体ダークガイアに近づいた。

「ステラ！」

シンがそう言いステラをダークガイアから出した。

「ステラ！」

「シ……ン……。シン、ステラ守るって言った。なのにシン、ステラにドードでトドメをつ、ゲフツゲホツ。」

「ス、ステラ……。」

「シン……ステラ……。裏切った。シン〓裏切り者。」

「ス、ステラ……？」

「シンは裏切り者。」

「止めてよステラ……。」

「シン……。裏切り者。」

そう言いステラは息絶えた。

「俺、守るっていつ言ったけ？」

・フロントムピンク・

「所詮ステラでしたか。で、あなたたちは何故ここに？」

発進してからキラとアスランは気づいた。

それぞれの機体のバックパックが壊れていたことに。その後、救助隊に回収され今に至る。

「これはお仕置が必要ですね！。」  
「そう言いラクスは鞭を取り出した。」

「あれは全部整備士が悪いじゃないかあああああ！！！」  
「アスランの抗議は虚しくアスランは眠れない夜を迎えた。」



嫌がらせて射出されたドードシルエット。裏切り者のシン。(後書き)

ドードシルエット、シートではなくドードがついています。

やっぱり決戦は宇宙で。恐ろしい作戦『グングニル作戦』（前書き）

今回は無駄に短い。

## やっぱり決戦は宇宙で。恐ろしい作戦『グングニル作戦』

・フロントムピンク・

「また失敗ですか。」

ステラが討たれたことを聞いたラクスはそう言った。

「こうなったら少し早いですがあの作戦をやるしかないですね。」

「あの作戦？」

ラクスの言葉に対しアスランとキラはそう聞いた。

「じきに分かりますよ。」

・戦艦KATUSHIKA・

「ふー終わった終わった。」

戦艦に戻った両津はそう言う。

「センパイ！やっとセンパイの機体の整備と修理が終わりました。」

向こうから中川がそう言いながら走ってきた。

「おお、ご苦労。」

両津がそう言ったとき艦内放送が流れた。

『艦内のパイロットに告ぐ、すぐに作戦会議室に集合せよ！繰り返す。艦内のパイロットはすぐに作戦会議室に集合せよ！』

署長の声だ。すぐに両津たちは作戦会議室に向かった。

・戦艦KATUSHIKA 会議室・

「諸君に重大な知らせがある。少し前からフロントムピンクの偵察として宇宙にいる部隊からの連絡でフロントムピンクがある作戦を実行するとの情報が入った。」

「ある作戦？」

署長の言葉に全員が聞いた。

「うむ。その作戦は」

- フアントムピンク -

「その作戦は『グングニル作戦』ですわ」

- 戦艦 KATUSHIKA 会議室 -

「グングニル作戦？」

「そうだ。グングニル作戦は月から巨大な線による射撃を行ったあと、超大型のレーザーで地球を攻撃すると言うものだ」  
それを聞いた一同は驚愕のあまり、

「そんな……」

しか言えなかった。

「この作戦は何としても阻止せねばならん。しかしフアントムピンク内に忍ばせている偵察部隊では力不足。だから我々も宇宙に行くぞ。フアントムピンクとの戦いを終わらせるぞ！」

その署長の言葉に一同は

『おー！』

と言った。

「では出発は明日だ。」

- フアントムピンク -

「今度こそあの青い球体の星をピンク色に染めるのです！」

- 戦艦 KATUSHIKA -

「では解散。」

署長の言葉で両津たちは自分たちの部屋に戻っていく。

- 両津の部屋 -

「宇宙か。今度こそフアントムピンクを倒す。」

・中川の部屋

「今度こそ僕も機体に」

・麗子の部屋

「ファントムピンクの思い通りにはさせない。」

・大原部長の部屋

「グングニル作戦……。何て恐ろしいんだ……。絶対に止めて見せる。」

・シンの部屋

「ステラの仇は俺が討つ！殺したのは俺だけだ。」

・エドワードの部屋

「切り裂くぜ」

・ジエーンの部屋

「終わらせてやる。」

・レナ・イメリアの部屋

「桜吹雪の本当の意味を教えるわ。」

・マリアの部屋

「久しぶりの登場ですか……。」。」

そして皆、早く寝た。

決戦に備え……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8186h/>

---

機動戦士ガンダムSEED RYOTU

2010年10月10日12時37分発行